

## 「軍人からシベリア抑留<sup>よくりゅう</sup>体験」

大出泰司

歳月の流れは早いもので、今から70年前のことです。それは昭和20年2月、私が21歳<sup>さい</sup>の時でありました。実家から私の勤務先の会社に電話がありまして、宇都宮の36部隊から召集<sup>しょうしゅうれいじょう</sup>令状が来たということでした。入隊まであと3日だけしか余裕がなかったのです、大変でした。

後始末が大変で会社との手続き等済ませ、私物の整理、送付して全部<sup>かんりょう</sup>完了し帰郷の身になり、さあ電車に乗って栃木<sup>とちぎ</sup>駅に到着したのが、入隊日の前日午後6時でした。もうその時は栃木<sup>とちぎ</sup>は2センチ程の積雪でどんどん降り続いていました。実家方面に行く定期バスはすでに終わりになっていましたので、隣<sup>となり</sup>のタクシー営業所へ行きました、明日入隊の件をお話ししましたが、雪のためですか、簡単に断られました。この当時は電話機、車等ある家庭はなかったのです。もう実家まで歩く以外はないと決心し、荷物を肩<sup>かた</sup>に実家まで6キロメートルの距離<sup>きょり</sup>を歩きました。実家まで2時間余りかかり到着し、ホッとしました。

実家には親戚<sup>しんせき</sup>、近所、組合の方々が私を長時間待ったことと思  
います。私と対面してからはすぐに帰ってしまいました。それから家  
族だけの最後の一夜を語り過ごして就寝<sup>しゅうしん</sup>しました。

翌日<sup>きしゅう</sup>起床したら驚<sup>おどろ</sup>きました。雪が40センチほどの最近見られな  
い大雪でした。栃木<sup>とちぎ</sup>行きのバスは運休になりました。昨夜同様歩く  
のが苦でした。しばらくして駅<sup>どうちやく</sup>に到着しましたら周辺から入隊する  
方が10人くらい集まっておりました。鉄道も雪のため両毛線<sup>りょうもうせん</sup>と東  
武線が全線不通で何時開通になるか見込み<sup>みこ</sup>みないとの掲示<sup>けいじ</sup>が  
出されてあるので困っておりましたら、栃木<sup>とちぎ</sup>市役所で貨物自動車を手配  
しましたので入隊する方は乗車してくださいとのことで助かりました。  
時間までには無事入隊できました。

入隊後は宇都宮<sup>わず</sup>に僅か7日いて中国に移動され、当地で軍人とし  
ての基礎<sup>きそ</sup>教育を受けて終了<sup>しゅうりょうご</sup>後は8月まで駐在<sup>ちゅうざい</sup>し、部隊<sup>きたちようせん</sup>は北朝鮮に  
移動し、間もなく20年8月終戦を迎えました。

武装解除<sup>かいじょおよ</sup>及び武器放棄して無装備になり、あとは内地<sup>きかん</sup>帰還の船を  
待つばかりになったのです。10月に入ってしばらくして港に船が  
入港したので皆で喜んで乗船し、しばらく船の中で越<sup>こ</sup>し港に入港し  
ましたが、ここは日本ではなく、ロシアのウラジオストクだと喜び

も一変し、下船になりました。

シベリアはすでに10月でも真冬で北風強く寒さが厳しく、我々が泊まる<sup>と</sup>宿舎がないのです。その晩は野宿で夕食も出ず、最悪でした。翌日は早々にシベリア鉄道で貨車に乗せられ、一昼夜食事と水も<sup>あた</sup>与えないで、停止したところは広大な原野で四方八方、樹木、家屋など何一つない草原にただ一棟<sup>いっとう</sup>あるのが収容所でした。外回りは<sup>ゆうし</sup>有刺鉄線が二重に張られ、<sup>とうぼう</sup>逃亡できないようになっていました。収容所の内部は板張りで、電気、ガス、水道、<sup>ふうろ</sup>風呂、勝手の設備がなく部屋の中心部にペーチカ（ストーブ）があるだけで炊事<sup>すいじ</sup>は別棟<sup>べつむね</sup>にあります。水は近くの川水を利用するのです。電気はないので油ランプを利用しました。

シベリアの四季は次のようになります。冬は6か月（10月から3月）、春は2か月（4月から5月）、夏は3か月（6月から8月）、秋は1か月（9月）であります。冬期中は毎日<sup>うすぐも</sup>薄曇りの天気です。太陽の光線がほとんど見られません。ロシアに連行されて間もなく身体検査が<sup>じっし</sup>実施されました。これは体内の精密検査ではなく、体の外面を見るだけなのです。<sup>はだか</sup>裸になってロシアの軍医の前に行き肉付きがよいかの検査で、良好な者は1級、次が2級となり、この人は重労働の作

業をする訳です。3級の者は細身の人が指名されます。労働は軽労働で燃料用の薪作りと軽い農作業が主なる仕事でした。4級になった人はやせて骨ばっている人で、作業が無理とされ作業はありません。冬の作業で朝出発前に気温が氷点下30度以下になったときは作業は中止になります。

寒い国で生活は食べ物が大事と思いますが、抑留されている人たちの食事は苦勞しました。朝と夕食は主食として毎日小豆100パーセント、ジャガイモを細かく切った混ぜ物、ジャガイモだけ入ったスープで副食（おかず）、漬物が全くないのです。昼は黒パン2枚であります。肉、魚、卵、酒等は一度も腹に入れられなかったです。食事の量は、仕事量によって計算され、仕事量が多いほどたくさん食事にありつける事になるのです。このカロリーのない食事よくりゅうで抑留中にあの労働たに耐えて、よく体がもったことに感謝しております。

抑留よくりゅう中不思議なことがありました。頭髪とうはつが全く伸びないため散髪さんぱつは一回もありませんでした。すねの毛ぬが抜けてきれいになくなりました。爪つめも伸びず爪切りつめきもなかったのです。栄養不足が原因で体がここまで落ち込んだのです。

病気けがや怪我けがの際いりょうの医療関係のことであるが、我々の体を守る薬が

ないのです。例えば、頭痛<sup>およ</sup>及び咳<sup>せき</sup>が出るので作業前<sup>しんさつ</sup>に診察に行くのですが、体温計が出され体温が38度以上の熱があるとその日は作業が休めるのですが、38度より少しでも低いと作業に行くようになるのです。休みになっても薬は無し、食事も一般の人と同じ、ただその日は休めるだけなのです。

終戦後ロシアへ連行された人は、北朝鮮<sup>きたちようせん</sup>と旧満州<sup>まんしゅう</sup>に駐在<sup>ちゆうざい</sup>していた軍人がほとんどで、捕虜<sup>ほりよ</sup>同様の扱<sup>あつか</sup>いをされ、嚴寒<sup>げんかん</sup>と飢え<sup>う</sup>の生活で苦勞<sup>ひさん</sup>しました。この悲惨な実態を風化させないように、後世に残したいです。

